



「願い」のあるデータを

玉腰和典

坂井ひづるさん（愛知支部、小学校教諭）のホールディングバレーボールの授業で小学校4年生の子どもたちが次のような感想文をかいてくれました。

「Tさんはネットのすぐちかくに打ったり、すぐはしっこに打ったりしてどこに打たれるかわかんなかったのですごい」。

「2班のみんながいってたけどぼくはぜんぶスパイクがねらったとこにうてました」。

この子どもたちの感想文がうまれた背景には次の2つのことがあります。1つはコート図を準備してボールの落下ポイントにシールをはっておくことで「相手のコートのどこにアタックをおとせばよいのか」を調査した結果、「コートのはじ」や「人と人との間」をねらえばよいとわかったこと、もう1つはグループでの教え合いを組織し、みんなで「できるための『わかる』」を追求していったことです。

みんながうまくいくポイントを共有し、相互観察していたからこそ友達の「うまさ」がみえ、評価することができたのです。データは事実でもって子どもたちに「わかる」を保障するので、自信をもって友達を評価するようになります。みんなで発見したポイントで

教え合いうまくなれる、子どもたちのイキイキとした姿は価値あるデータによってひきだされます。「データ」は教師の心強い味方なのです。

それもそのはず、生みだされた「データ」は目の前の子どもたちに「○○」をわからせたい、できない子の存在に気づかせたいという教師の「願い」によって意図的につくりだされたものです。「データ」の前に教師の「願い」があるので、「データ」を活用する場合は「何のためのデータか」を鮮明にしておく必要があります。

その意味で、既存の調査方法がすべての子どもたちに有効なものとは限りません。「データ」をつくりだす調査方法は目の前の子どもたちの実態や教師の「願い」によって変化するため、常に検討され、つくりかえられるべきものなのです。本号で報告されるデータを生かした実践も挑戦的などりくみの1つであり、これらはまたみんなで再検証しつくりかえていくことが必要となります。互いの実践にヒントをえながら、「願い」のあるデータをつくりだし、子どもたちの「わかる、できる」世界を広げていきましょう。

（たまこし かずのり／愛知支部）